

【パネルディスカッション】

「地域が『世界』とつながる方法」

司会：岩佐和幸

パネリスト：羽瀨一代、内藤直樹、岩佐光広

(岩佐和幸) 時間がまいりましたので、再開したいと思います。ここからはパネルディスカッションということで、フロアの皆さんから頂いた質問をパネリストの方に投げ掛けながら、今日のテーマである「地域が世界とどのようにつながっているのか」という議論を深めていきたいと思っています。

幾つか質問を頂きました。中川先生と海野先生と那須先生のお三方から頂きました。最初に中川先生、ご本人から直接発言をと思います。先生から三つほど出ていると思いますが、各パネリストの方に対する質問を合わせてお願いします。

(中川香代(高知大学教授)) 皆さんありがとうございます。羽瀨先生のお話からは、ルラリア研究所との共同事業のスタートのプロセスを非常に具体的に教えていただき、どうもありがとうございます。質問は、これまでの弘前大学とルラリア研究所との共同研究のテーマを幾つかご紹介いただければと思います。

それから内藤先生には、世界農業遺産登録をめぐる課題を教えていただき、また、地域に向けられたまなざしに私自身もはっとさせられ、気付かされるものがありました。質問は、地域住民の中に登録を目指そうという動きは、もともと小さかったのでしょうか。また、登録の運動のメンバーに若者が入っていたのかどうかということをお聞かせください。

そしてラオスについてご報告を頂いた岩佐先生には、これまで20年間、小学校等の学校を作ってきて、学校で学んだというラオスの人と高知商業高校の当初作った歴代の人たちの大人になってからの交流にはどうしてつながっていかなかったのか、あるいはつながったのかということをお聞かせください。よろしくお願いします。

(羽瀨) ご質問ありがとうございます。共同研究のテーマについて、実はあまりよく分かっていないところもあります。私自身は、例えば出した本の中では、労働法、労働

の雇用の問題の研究をやったり、ものづくりの研究を紹介して、フィンランドでのものづくりとの比較をしたり、また、限界集落ではないですが、最北端のコリ国立公園での生活についての人類学的研究であったり、経済学であれば、労働経済学の先生が向こうの経済学の先生と一緒に、地域経済の活性化のようなものについて、EUのファンドを取りにいくプロジェクトを立てていました。これは失敗しましたが、われわれはEUのファンドを取りにいくような申請書を書いたり、システムを作ったりするきっかけとしては良かったのではないかと。また、経営学的な手法に関する地方の企業の経営の改善に関するものなどのテーマが挙げられています。

さらに、弘前市民を連れていって、地域貢献活動の一環とする、というプロジェクトもありました。高知はどうか分かりませんが、例えば今、地方では体育の授業が小学校や中学校で成立しなくなってきているといわれています。学校の先生が高齢化してきて、体育で例えばプールで泳いだり、外で一緒になってハードな運動をするということができなくなってきていて、実際の演技を子どもたちに見せることができない状況があります。例えばフィンランドでは体育という科目がなくて、体育施設にいるインストラクターのような人たちのところに学校の子どもたちが行って、そこで体育を教えてもらうというようなことをしています。弘前でも今、スポーツのNPOのスタッフが小学校や中学校に行って、教員のサポートで体育の実演をおこなう取りくみがあります。そのようなアイデアをもらってきたり、運動の苦手な子のプログラムをどのようにしていったらいいかというようなことを学んできたり、テーマは参加するメンバーの関心に沿ってやるという形になっています。

(内藤) ありがとうございます。事実的な結論から申し上げますと、地域住民に登録を目指そうという動きは、去年の段階ではほとんどありません。それから若者はいないというのもありますが、ありません。ですから、昨日のシンポジウムに120人の方がいらっしゃるといことは非常に大きなことだと思います。

というのは、過疎地の農村で、やっていることはこの人たちにとっては非常に当たり前のことです。ただただ大変なだけの活動です。その一方で、恐らく近代以降の観光産業や観光になるものの発展ということを考えると、当初は多分、より遠い過去や、より遠い他者、外国など遠い過去のもの、あるいは情報を集めることに非常に価値が置かれていたと思いますが、それがだんだん自分の近しいものをまなごしの対象にしていくという変化があって、例えば近年、無形遺産や無形文化遺産などが騒がれたり、昭和、大正のようなものがはやりたりということになっていくと思います。つまり、割と自分の

身の回りのことをあらためて変わったものだと見直して、商品化していくという動きが最近の観光におけるフェーズだと思います。一方で農民にとっては、単なるつらいだけの日常生活であり、これを観光につなげようと思に至ることは私の地域ではなかったということが一つです。

もう一つは、一般的な話をもう少し申し上げると、リーダーシップのとり方は地域によって、日本の場合でもさまざまです。例えば先日、視察に行った大分県では知事のトップダウンでやれとあって、部長級のメンバーを招集して申請にこぎ着けるということでした。これは非常に申請が早かったのですが、ではその後どうか。地域の方々が自分たちのやっていることの価値について理解したり、あるいは活用の仕方について思い至ったりしているかという、そこでは非常に問題が大きい。そういうことはなかなかできていないというような指摘を先日、国連大の実務家の方から頂きました。それ以外にも、例えば地元の商売をなさっているレストランのオーナーなどの方がリーダーシップをとったりする場合など、さまざまあります。

この徳島のつるぎ町の場合、2市2町の中でも、例えば祖谷などは観光で有名ですが、つるぎ町は何にするかという、ぱっと誰も思いつきません。何もない。そういう意味では、最も立ち後れているところの商工観光課の課長、市町村の職員です。彼は市町村の行政職員ではありますが、同時につるぎ町の方でもあります。彼がただ1人、わあわあと。みんな「あほちゃうか」と。その人は昔から変わったやつだと言われていたのですが、相手にされませんでした。しかし、僕のような変人がここに赴任してきて、少し話してみたら、たまたまマサイ族の研究をしていたりして、何となくやり方が分かっていたので、見てみると面白いということがあって、書類も作成できました。そのおかげで、僕は去年アフリカに行けませんでした。

そういうことがありました。すごく大変でした。県知事が決済印を押さないといけないのですが、押してくれないかもしれないというのが前の日ぐらまでであるというような状況です。上から下まで合意がほとんど取れていない中でスタートしたということです。落ちたけれども、幸い良い評価も頂きました。その上で、ある程度実現可能性がある段階で、あと2年後に向けて、住民と本当に進めていくのかどうか話し合えたということが、結果的には落ちて良かったのではないかなというような状況です。そのように考えています。

(岩佐光) ありがとうございます。大人での交流ということですが、これはまさに20周年を迎えて、この活動が次に展開しようとしているところにつながってくると思

ます。学校レベルを超えて、高知という地域でラオスとつながろうというのが今目指しているところになっています。それが、先ほどの「はりまヤストリートフェスティバル」でパネルディスカッションをやったということをお話ししましたが、そのときにビジネスプランという形で、高知の産業をラオス側に誘致しようと、ラオス側で何かできることがないか、ビジネスのレベルでそこをつなぐということができないだろうかという形で、今、活動を展開しようとしています。このレベルになると、現実問題として、交流というより、それをもう一步越えて、今度はビジネスとしてそこをつないでいけないかということを考えています。そのビジネスプランが何かないかという話が、パネルディスカッションのテーマでした。

今、中川先生がおっしゃったように、大人も関われるということはとても大事だなど。つまりOG・OBたちも関わりたいけれども時間が取れないという現実がある中で、株式の総会で説明するというのも大事だと思いますが、活動自体を見てもらうというのがいいのではないかと思います。それで、パネルディスカッションで提案したのが「高知商業生と行くラオスの旅」という話でした。既に高知で20年やっているのだから、活動自体は知っている人は多いです。ですから、多分、他の県でラオスの旅と言っても、人はあまり集まらないのではないかと思います。高知商業の重ねてきたものがあるので、これは観光業、観光プランとしていけるのではないかと考えています。加えてOG・OBなどに積極的に声を掛けて、たとえば株主優待などを作って、株を買った場合には少し安くするというようなことを組み合わせてやることで、卒業した後も関わられます。あるいは、保護者の人から見たときに、生徒たちがラオスに行くということを見るのも大事ではないかと思っています。

そんなことを考えたときに、まさにこれから目指そうとしているのが、むしろ交流というものをもう一步深めていく、展開していくというときに、商業高校らしくビジネスというところまでというのが今出ています。ですから、大人というか、学校を超えて地域の人たちも関わっていくようなプランをこれからやっという展開をしています。

(岩佐和) では、続いて海野先生。最初のグローバルの話は後で振りますので、個別の質問の方をお願いします。

(海野晋悟 (高知大学講師)) 振られると思っていなかったのですが、完全に任せっぱなしの自分の質問書を作りました。私からは羽瀨先生に、最後の締めの前ぐらいにあった「小さいからこそつながることができる」というのは杉山先生の言葉のようですが、これは

私の認識が間違っていたら教えてください。これはどちらかという、似たもの同士だからつながることができたという考えで私はいます。どちらかという、リンケージということで行くと、ノードが小さすぎるとパワー不足でかぶり合わないと思います。また、フィンランドと弘前という地理的な距離もあることで、パワー不足で気付き合えない。しかし、共通の森先生がいたことで、似たもの同士だということが再認識されてつながることができたという、活動が良い方向に流れたという認識でいます。ですから、われわれとしては似たもの同士の探し合い、マッチングをするというのが研究者にとって必要になってくるのではないかという認識を持ちました。そこについて、ご意見をお聞かせください。

それから、われわれの置かれている立場でも同じようなことが起こっていますが、森先生の後で小谷田先生が引き継いで、その後をどうしようという話になっているようです。そのヒントを何か見つけておられたら教えてください。

それから、内藤先生のご報告については、このハンドアウトの中にあつた、「なぜ自分はこのような状況にあるのか」という文言は、私の感覚からいくと、何か理想があるのだらうと思います。これを先生がなさった福島以西浜のものに重ねると、彼らにはどんな理想があつたのかというをお聞かせいただきたいということと、少し乱暴な言い方になるかもしれませんが、なぜ彼らは理想を追つたのか。どんな理想があつて、なぜそのときにそう思つたのかということをご存じでしたら教えてください。

農業に関して、昨日深夜帯の12時ぐらいから、NHKの再放送で、「限界集落株式会社」という番組をやっていました。再放送の最後、しかも最終回を見てしまったのですが、その前を全然見ていません。最終回を見ただけで、大体話が分かりました。やっていることは共通するところがあると思います。限界集落で、農業で、言葉は悪いですが、当てようとするというのでしょうか。しかし、そこで失敗してしまって、最終的には近代的な株式会社の制度ではなく、不祥事を起こしてしまうのですが、それを会社としてもみ消すというか、対応するのではなく、むしろ人間を大切にして株式会社を成立させるというように持っていきました。限界集落ありきの話ですが、それを見ていて、これは近いものがあると思っています。

彼らは、その話の中で農業に誇りを持っているようで、だから失敗しても、もう一回やり直させてほしいという話になります。内藤先生に対してですが、農業に対する誇りは彼らはどのようなものを持っているのか。それが持っているのか、持っていないのかということでも構わないので、教えてほしいところです。

岩佐先生に対しては、近しい同僚でありながら、全然知らなくて、今回ラオスの高知

商業高校のことを教えてもらって、なかなか面白いことをしているのです。私は金融の研究をしているので、日本の面白い現象としては、貯蓄性向です。みんな貯蓄をする。一向に投資にお金が回らないという現状があります。しかし、今、高知商業高校の中では、面白いことに投資をやっています。しかもそれは国内投資です。学内というか、学校内の会社に対して投資をしている。日本はどちらかというと、投資は海外です。証券会社のうまい口車に乗って、海外の債権を買ったり、海外の会社のファンドを買ったりしています。一向に国内の企業にお金を回すことはしていない。それが非常に面白いと思いました。追跡的に、高知商業高校出身者が投資をした場合に、どういう反応をするかということアフターセッションのところで聞かせてもらえればいいのですが、これは研究テーマになると聞いて聞きました（笑）。

また別の話ですが、彼の話の中で、地元を離れるという話が出たと思います。地元を離れるということが私は悪いことではないと思います。その人の人生プランにおいてそのような選択をした。何か選択肢というか、比較対照するものがあって、その片一方の地元が落ちたわけです。地元が落ちた理由を考えなければいけない。残らなかった理由を考えなければいけない。地元というものにおいても、離れていても地元を常に感じる必要があるのではないかと思います。それはどういう取り組みがあるのかということをお話してほしいと思います。以上です。お願いします。

（羽瀨） ご質問をありがとうございます。このシュリンク・アンド・リンクという言葉は、もちろんこの話にも当てはまるのではないかと考えて持ってきましたが、青森県佐井村という人口2000人の無医村があります。この先、多分どんどん人口が減っていくだろうと目されている村です。約3年、学生たちと調査をしています。そのときに、20年ぐらい前に人口減少を始めたとき、産品の村おこし運動のようなことを行政主導で一生懸命やりました。そのときは、まだもう少し人口がありました。

いろいろ見ていくと、今はものすごく小さくなって、崖っぷちという状態になったことで、行政の人も漁師さんも普通の専業主婦も、2000人の村で多分20~30人ぐらいの規模の人が何とか村を維持したいという気持ちで動いて、漁師さんに神経締めという技術を覚えてもらって、今は沖縄や東京の居酒屋さんや、グアムのヒルトンなどを顧客として獲得することができ、ものすごくもうかっています。それは、その前の状態では考えつかなかったことで、みんなで、もうこれは崖っぷちだ、この人口がこれ以上減ったら困るということで、小さくなって、縮んでいくという崖っぷちの状態でも何とかしようということで、おこなったためだと考えています。この時に、アイデアやサポートを地

域外から取り入れたという経緯を思いだして話を作りました。

森先生と小谷田先生はある意味すごく短絡的で、何だそれはという感じです。しかし、すぐに大使館に行ってしまったという機動力は、少し大きいとできないというか、あちらにもちゃんと話を通さなければ、こちらにも話を通さなければとやっていると、深くリンクしていきません。しかし、「いいじゃん、どうせ2人しかいないから、2人でとっと大使館に行ってみよう」と、すぐ行動に移せる機動力という意味では、小さい方が高いのでリンクができるということで使わせていただきました。

それから、私も鹿児島に半島が二つあって、その端で青森と同じような何かを見られるのではないかと行って行ったら、全く違うものを見いだしてしまったというか、こんなに同じ農業県なのに考え方も農業のやり方も全く違う。家族の構造も違ったりして、結局似ていなかったから、もう一つつながれなかったという例があるので、確かにご指摘のとおり、似ているということがその後の研究や問題解決の思考には非常に重要だったとは思います。

それから、小谷田先生1人がやっている状態と言いましたが、佐井村の話もそうだし、基本的に何かの集団で結構頑張れるのは、カリスマ、魅力のある人材が1人いて、そこに人が集まってきて、その人が頑張っているからみんなもやるというようなことが多いと思います。先ほど少し言いかけて、あまり言えませんでした。組織・行政主導モデルは全然話になりませんが、サークルモデルは大阪の「graph」というアーティスト集団に教えてもらいました。普通、アーティストは一人一人ですごにやります。アーティストそれぞれは全然違う価値観で、全然違うものを作っているのだけれども、graphのアーティストたちが酒席でまちについて話した時、思いついたそうです。それは、空きビルが景観的にも悪いし、もったいないということで、何か俺たちにできることはないかということで面白いプロジェクトをいろいろ成功させてきました。地方に行くと、何かアートプロジェクトをやるといったとき、こういうものを先にやりたいではなくて、そこにいる人で楽しめる何かをやるというのです。

フィンランドは周縁だけど、何が良かったかという、北欧というのはちょっとおしゃれでわくわくする感じがあるから、外国の研究者と共同研究をやったことのない先生でも、行ってみて何もなくてもいい。取りあえず行って、楽しければいいんじゃないかという気軽な感じでやれるようになるのが、多分一番いいと思います。小谷田先生にお伺いしたら、弘前大学人文学部も年俸制が導入されて、これから採る人はみんな年俸制になっていきます。年俸制は怖いから、すぐには年俸制に変えませんが、そもそもルリア研究所は年俸制です。そうすると、今足りない外国人の人材などを有期で雇用し

て、こちらで1年間だけ教えてもらって、またルラリア研究所に帰ってもらうようなことや、われわれも年俸制になった研究者などには、1年間ここにいないで、ルラリア研究所に行って、向こうで働いて、また帰ってくるというように、雇用というか、われわれ研究者の労働システムのようなものも含めて変えていくことによって、研究者にとってもう少し魅力のあるようなプロジェクトになれば、小谷田さん1人が頑張らなくてもいけるのではないかというようなことを話していました。

(内藤) ありがとうございます。「なぜ自分は」と考えるときに参照するものは「理想」だという言い方をされていたと思います。先ほどご紹介したアパデュライは、その理想についてアメリカ社会に移民してきた高学歴者の例をあげています。私自身もアメリカで難民研究をしていますが、難民は新天地、つまり経済的に非常に豊かな国である種の理想化された暮らしを夢見て来ますが、結局は、例えばタクシードライバーをやっている。母国ではそれなりの学歴があるにもかかわらず、新天地で底辺層にしかなれない自分を発見する。あるいは警察による暴力の対象になる。そういうとき「こんなはずじゃなかった」と思う感情が、ご質問の感じに近いのではないかと思います。

つるぎ町のような日本の過疎集落では、アメリカへの移民が抱く理想とそれに対する絶望感とはまた違った感情があると思います。そもそも、私たちはいつもそんなに理想に燃えて生きていたりはしないと思います。私たちの何気ない日常生活を支えているのは、恐らく私たちが今知っている、ある社会の制度や価値観などが今日も存在するし、明日もあるだろうという信念でしょうか。とりわけ人間は残念ながら不死の存在ではないので、自分の死後、次の世代もこういうことが続くだろうという日常感覚あるいは根拠の無い信念によって社会は支えられている面があると思います。そのような感覚や信念が希薄になっているのかもしれませんが、つまり、「理想」というほど確固たるものではなく、根拠もないけれども、日本の地域社会で今の70歳ぐらいの人たちが暮らしてきたような暮らしが今後も残るだろう、明日もあるだろう、次の世代もあるだろうという信念が揺らいでいるというところに非常に問題があるように思います。それゆえ、理想に対する「絶望」や「怒り」というよりは、「無気力」や「諦観」という感じがします。

もう一つ、「限界集落株式会社」ですが、最近ではテレビを見る暇がなくて、昨日の夜中にホテルのテレビのチャンネル表に「あったな」と思いました。お話の感じは大体分かりました。農業の誇りに関して二つの面からあります。一つは、例えばマサイ族のような牧畜民の遊牧という生業に対する誇りや思いを例に考えます。彼らは我々のある基準からすれば「未開」で槍を持っている、いつも戦争をしている、強そうだというイメー

ジがあります。それはまさに誇り高い「マサイの戦士」です。こういうイメージは、植民地期とくに両大戦の折に、東南アジアやアフリカが主要な戦場になった際、宗主国が支配地域の人々を兵隊に登用したことに関係して形成されました。そのような、外部によって創り出されたイメージは、それを消費する外部の人間にとっては心地良いものだと思います。

かといって地域の方に農業や生業に対する想いや誇りが無いわけではありません。たとえばマサイ族にとって牧畜は、単なる生計維持の手段、生きていくための手段を超えた非常に大事な価値をもっています。それはキャトルコンプレックス（牛文化複合）と呼ばれています。牛は単なるミルクを飲むとか、売って金に換えるなど、生きていく手段ではなくて、社会関係をつなぐ、あるいは、それを増やすことそのものが人生の価値を高めるものです。増やして、懇親して、奥さんをもらい、子どもをつくり、生きていく。世代を超えてそれがつながっていく。このように家畜は彼らの社会の価値観の根底を支えるものであるので、牧畜をすることに、ある種の「誇り」があるのではないかと思います。それはつぎ町の場合も同じで、彼らにとってあの農業は単なる生計手段であるというよりも、自分たちの価値観、あるいは社会や文化を支える基盤であるという面では、もちろん人々の誇りにつながっていると思います。

もう一つは、「人間」を大切にするという点です。これは一見するといかにもドラマっぽいストーリーですが、無形文化遺産は今、人々が行っている活動です。それゆえ展示できるマテリアルはありません。農業遺産はまさにそうで、農業のやり方そのもの、現在機能している価値観や技術や知恵や社会環境などの総体です。つまり、無形文化遺産や農業遺産は人ありきです。それゆえ技術や知識、価値観の総体が継承する必要があります。

ですから、農業遺産づくりはまさに人づくりである。継承の問題なのであるというように昨日のシンポジウムでも論点になりましたし、そのような面では人間が大事なのであるというドラマの指摘は、あながち間違っていないと思ったりします。

(岩佐光) 地元を離れることはそんなに悪くないのではないかということについては、自分自身も流れ流れて福島から高知に来ているので、それ自体を否定すると、僕自身を否定することになります。ですから、それ自体は僕も悪くないと思います。ただ、そのときになぜ出ていくのかということと同時に、なぜ残らなかったのかという方を考えると、聞かれてなるほどと思いました。ただ、今回内藤先生の話していることとご指摘されたことをつないで考えると、なぜというときに、目的とそれを実行するための方

法があるとすると、こういうことをやりたい、何かをやってみたい、自分はこういうものになりたいというような目的の下で外に出ていくということがあり得ると思います。それを実現しようと思う。ただ、そのときに、目的自体を地元で実現する可能性がもしかしたら不在なのか、それともあり得るのだけれども、そこを生み出していく余地があまりないのかもしれないと聞いていて思いました。

そう考えると、世界とつながりながら地元で根差して生きていける若者たちというのは、僕は今、聞かれて話していて、そういうことかと思ったのは、目的はいろいろなものを持っていて、それを実現するための方法として外に出て何かやるということももちろんあると思いますが、もう一方で、ここで言いたかったことは、多分、そういう方法を地元でも見つけてやっていくことができるような若者たちが育つのではないか、ということです。そう考えると、地元に残ってもできることがあるということにつながっていくのだろう。そうなると、もちろん出ていくことと残ることはどちらもあり得ると思いますが、出ていなくてもできることはあるという気付き自体は大事ではないかと思えます。このようなところの気付きを、高知商業などの活動は本当に実践を通じて具体的な形でやっているということが僕自身にとっても、高知でこういうことができるのだということに気付かされたところがありました。そのような意味で、外に出るのは悪くないけれども、地元で目的を実現するやり方の方を考えていく若者を育てられるのではないかと思いました。そういう意味では、そういう大人も育てられるような事例なのではないかと思っています。

(岩佐和) では、あと10分ということで、こちらにもう一つ質問が来ていますが、羽瀨先生にということで、名前はありません。高知大学で地域の魅力を海外・県外へ発信しようという取り組みを行っているサークルがあります。弘前大学では、そのような学生が主体となって、世界と地域をつなげる取り組みは行われているのかどうかということです。

(羽瀨) 私が知る限りでは、ありません。弘前大学の学生さんたちは、そもそもあまり外に出たがらない人たちです。特に弘前大学に来るのは、大体7割が青森県です。とにかく出たくない人たちが来るのが良くないです。たまに、もちろん国際的に頑張りたいという方もいますが、そういうことを聞いたことはあまりありません。そこで、どうするかということなのですよ。

(岩佐和) ありがとうございます。時間が終わりに近づいていますので、最後に海野先生、振りましょうか。では、海野先生、最後は那須先生にご質問を頂いて、それで終わりにしたいと思います。

(海野) お三方のお話を聞いていて純粋に思ったことは、羽渕先生はフィンランドとのつながり、内藤先生は遺産という登録をめぐっての世界とのつながり、岩佐先生はラオスとのつながり。つながっているグローバルな話ではあるけれども、グローバルというのは海外と必ずリンクしないといけないのか、日本国内でもできるのではないかと、国内だけでもグローバルというのものもあるのではないかと、全然専門家ではないので、純粋に思いました。お三方のご意見をお聞かせください。

(岩佐和) 那須先生、最後に質問をお願いします。

(那須清吾(高知工科大学教授)) 先ほど聞かれたことと多分かぶっているのですが、短くしますが、つながる相手が世界である必要はないと思いますが、つながる目的は何なのだろうと。つながるといのは手段ですから、目的があるはずですが、ややもすると目的を考えずにつながっているということは、一生懸命つながろうとするわけですが、実現しようとしているものは何なのか。特に地域にとって何なのか、あるいは教育でもいいのですが、どういう人材を育成しようかというのは分かりやすいですが、特に地域にとってつながるといのを、どう意識して、何を目的にされているかということ、どなたでも結構ですから、聞きたかったのです。私自身、少し曖昧だと思っているからです。

(岩佐和) これが最後になると思いますので、3人の方、1人ずつお願いします。羽渕先生から。

(羽渕) 私個人としては、それほど一生懸命国際化する必要はないと思っていますが、やれと言われますよね。みんな結構大掛かりに考えてしまうけれども、そんなに大掛かりに考える必要はない。楽しみで、私のように自分の研究とは全く関係ないものでも、そんなに考えずにちょっと遊びに行くような気分で行って、行ったからにはプロなのだから、それなりの報告書や出版、成果を1個ぐらい出せば、それでいいのではないかなと。そこでまた新たに別の視点も入ってくるかもしれないしというぐらいのつもりなの

で、別にやる必要はないのではないかと本当は思っています。

それから、何の目的があるのかというと、表向きは、地域には問題が山積しているし、大学はCOCも取ったし、大学に解決しなさいと言われていたのだから、税金でご飯を食べている以上、それはやらなければいけないだろうと。海外に解決しているモデルがあるのだったら、そこへ行って盗んでくればいわけで、まねをすればいいのではないかなど。先ほどの体育の話などもそうだし、雪をどうするか。今、青森県は短命県ということで行政的にはこれを何とかしたい。他の県に比べても、40代や50代が死ぬ率が高い。何とかしたいわけです。スポーツをしないことと、食事の問題です。フィンランドは週に1回スポーツをする人が8割以上います。すごく面白いシステムを持っていて、まねできる場所はそのまま導入してくればいいと思っています。

ただ、やる側の方はすごくしんどくなってしまいますので、気軽な感じで、やれるときにちょっとやって、他の人がまたちょっとやるというぐらいで、お金がどうなるかは別としても、そういう気軽な感じで、楽しみで、余技でやれる範囲でいいかなと個人的には思っています。

(内藤) 最初の質問ですが、それこそ私の発表でお伝えしたかったことです。つまり、これから「つながる」ではなく、すでに「つながっている」ことを前提に、つながり方をどう再編するかというのが問題になるということです。たまたま私は今回、世界農業遺産という、国連というわかりやすくグローバルなものに絡んでいて、採択されれば海外の観光客を迎えたり、途上国と交流するという可能性がある事例を取り上げていますが、必ずしも本日のテーマとして取り上げる必要はありませんでした。日本の他の地域社会の事例でも良かったかと思えます。

さて、地域社会の人びとが世界とのつながり方を再編する例に、先住民運動があります。北米やオーストラリアの先住民などが置かれている国家の中で、「土地を返せ」、「あれは私たちのものだろう」と主張しても、彼らはマイノリティですし、通常であれば誰も聞いてくれません。そこでまず国際社会に働きかけ、国際社会が国家に対して圧力を掛けることによって、自己の要求を達成しようとするという試みが先住民運動です。

ここで日本の地域社会に転ずると、各地域の人口は非常に少ないです。過疎・高齢化がすすむ現在では「コンパクトシティ」のような話があります。確かにお年寄りたちの中には「もうここでの生活は疲れました」といって拠点を別に作ってもらって、そこに住んでもいいという人たちもいます。そこで村のお葬式をしましようという人たちもいます。しかしながら、自分たちがしてきた暮らしが今後も続くのではないかと何となく

思って暮らしてきた人びともいます。ところが、それがどうも実現しそうに無いので、どうしたらいいのか分からないし、絶望している人たちもいます。

つるぎ町の場合、こうした人たちが自己実現していくための手段として、国家を飛び越えて、国際社会—ここでは国連ですが—を利用する。そしてそれを介して自己の目的を達成するという戦略をとろうとしています。利用する対象は国連かも知れませんが企業やNPOかも知れませんが、いずれにせよ国内／国外ということではなく、国家以外の諸アクターを利用しながら、自己実現をしていくさまざまな地域の試みに注目することが重要であると考えます。

(岩佐光) 今、内藤先生と羽瀨先生が言ってくれたので、僕が言うことはなくなってしまったような気がします。僕なりに思うのは、外国でなければ駄目かということ、そんなことはありません。僕自身、ラオスをやっている、そういう縁があってこの活動に興味を持ったのがそもそもきっかけで、知ってみたら面白いことが分かる。そういうときに、同じように何かのきっかけで、国外でなくてもいいというのは本当にそのとおりで、今回あえてどういう人を呼ぶかというときに、中央の人は呼ばない。地方大学の人たちに来てもらうということを前提に考えてみました。今回のお話を聞いてみて、ここでつながっていくこともできるということもあります。ただ、もう一方で国内だけでやる必要もないというのが今のご時世かなと思います。

そういう意味で、今回は海外とつながるということを経由して、地元の話を見ていきましたが、内藤先生がおっしゃったように、既にそのようなところとつながっているし、つながられるような要請が非常に強い中で、それを抜きに国内でというのも難しいし、そういう要請があるからといって、安易に乗って海外と、というのも難しいということはあるのではないかと。

そんなときに内藤先生が言っていたとおりだと思いますが、どのようにつながっていくかということと、海野先生がおっしゃっていたマッチングの選択肢が今は本当にグローバルにできるようになっていく中で、国内・国外を問わずにもっといろいろな可能性があり得るのだということは、今回思うところでした。ありがとうございます。

(岩佐和) どうもありがとうございました。本当はもっと議論をしたいというか、皆さん、もっと発言したい方がいたかと思います。このパネルディスカッションの中で、例えば国家の関係性をどう作り変えていくか、あるいは地域の担い手をどういう形で持続的に維持していくか、あるいはグローバリゼーションの問題など、いろいろな論点が

あるかと思います。申し訳ありませんが、この後の懇親会で延長戦がありますので、ぜひそちらにもご参加いただきたいと思います。

最後にコーディネーターの私から、今日のまとめに入りたいと思います。今回のテーマは「地域が『世界』とつながる方法」ですが、このシンポジウムのテーマで、以前読んだことのある、『バナナと日本人』という有名な本を書いたアジア研究者の鶴見良行の「田舎の主体性」というエッセーを振り返ってみたいと思います。「田舎の主体性」というのが面白いタイトルにひかれて読みましたが、どういう内容かという、フィリピンやインドネシアを事例にして、国と地域、中央と地方の在り方を論じた内容です。そこでは、地元の人々の意識はどうか。インドネシアの人、例えばスダ地域に住んでいる人に、自分はどのようなアイデンティティなのかといったときに、インドネシア人という意識はないようです。むしろ「オラン・スダ（スダ人）」だという意識がある。ある意味、ローカルな意識が強い。あるいは、首都から放射的、求心的に地方が支配されるという形ではなく、中心がない。先ほど細胞という話がありましたが、地方が全体と多角的につながっているというエピソードなども紹介しています。

その一方で、アフリカでもそうですが、開発を契機にしながら世界市場と直結していく。そのようなところに日本資本が入っていったりしますが、そういう形で、世界市場と直結した中心（首都）によって、地方が押しつぶされていくという流れが東南アジアで結構出てきている話で、そのような指摘なども出てきています。

鶴見さんが当時指摘した「地方の主体性」という見方は、例えば東南アジアやグローバルな視点から日本を考えたときに、日本の行き過ぎた東京中心主義、コンパクトシティや消滅可能性都市といった議論があります。そのような東京中心主義に対する批判は解毒剤になるのではないか。今日のシンポジウムはいずれも東京中心のグローバリゼーションではなく、先ほど岩佐先生がおっしゃったように、地方大学の研究者が自分たちに根差しながら地域をどうしていくのかといった議論に展開していくと思います。

例えば小さいからできるシュリンク・アンド・リンクや、地域住民が再編成していく、あるいは「地元性」というようなキーワードが出されましたが、今日の議論を経て、私たちはこうした「地方の主体」を発見し、そこから学び伝えていくことを引き続き実践していくことの大切さのようなものを、今日の議論を聞きながら、私自身は実感しました。

そのようなことですので、これからもぜひ皆さん自身、引き続き議論を続けていきたいと思っています。これでシンポジウムを締めくくりたいと思いますが、皆さま、長時間議論に参加していただきまして、どうもありがとうございました。最後に、今日報告

をくださいましたパネリストの3人に、皆さんの温かい拍手をお願いします(拍手)。

それでは、最後になりましたが、閉会に当たりまして、高知人文社会科学会会長の吉尾寛人文学部長に一言頂きたいと思います。

(吉尾寛(高知人文社会科学会会長・高知大学教授)) 先生方どうもありがとうございました。議論は尽きないと思いますが、一つだけ言わせていただきたいと思っていますことがあります。質問状とは別のことです。私たちは今日、羽渕先生、内藤先生、自分はこういう専門なのだけれども、しかし、こういう地域に関わっているという、二つの角度というか、観点を持ちながら話しておられます。岩佐先生も倫理学というか、それでラオスということになっていますが、それを無理やり一緒にしないのです。それぞれの距離を感じながら。恐らく先生方も、フィールドを仮に持っていたとしても、やっている分野には地域というのはいないかもしれません。つまり、もっと普遍的な何かを持っている。そして、そのようなものと地域の問題を一緒にくたにしないで接近を図っていく。

今、僕は時々、地域の創生などいろいろなお話を聞くときに、少し失礼かもしれませんが、行政や生の政治といったものと研究者が一致させようとするような動きがあるのが、私が非常に気になることです。大学というのは地域の中で何のために存在するのか。そこに今日の先生方のご発表は、いろいろな意味で考えさせられました。先生方がそれぞれ自分の紹介、自分の分野、それからこういう問題を扱っているということに分けて考える。そして、そこに何かつながりを、未来の扉をより開こうとするようなお話をします。そういうことが自然体で、この大学にとって必要なことだと思います。

私はそういうことを再認識させていただいたということで、今日の先生方のお話、それからいろいろなフロアからのご意見には本当に勉強させていただきました。これを糧に、また明日につなげられると私は非常に感謝しております。皆さん、ご参加いただきまして本当にどうもありがとうございました。まだ懇親会もあるので、そこでぜひまたお話を続けたいと思います。どうもありがとうございました(拍手)。

(岩佐和) それでは、長時間にわたりましたが、高知人文社会科学会の公開シンポジウムを終わりにしたいと思います。